

かなえ  
長沢鼎という生き方  
— 回想のノートから —

---

犬塚孝明

はじめに

私が長沢鼎という人間に興味を覚えたのは、恐らく十歳前後の頃であったろう。記憶の糸を手操るのは容易ではない。その時、私は母から一枚のセピア色をした古い写真を見せられた。そこに写っていたのはやや年老いた男の姿であった。一点を見つめる鋭い目と、凜とした風貌、スーツを見事に着こなしたその男に興味を抱いた私は、「だれか」と訊いた。

「長沢のおじさま」というのが母の答えであった。写真をよく見ると右下に Aoyama Photostudio, Aoyama Tokyo とある。東京の青山写真館で撮ったものだとわかる。その後、その人物について、時おり母と交わす会話を通じて、しだいに長沢なる人間の輪郭がおぼろげながら私の中で形を持ちはじめた。

昭和28,9年頃の話である。当時まだ母の親族の間では、「長沢のおじさま」は強い存在観をもって語られていた。長沢鼎は歴史上の人物ではなく、明らかに尊敬すべき身内の一人として日常性のある存在であった。母が長沢鼎に遇ったのは、大正12年（1923）6月、7歳の頃であった。長沢がアメリカから最後に帰国した年である。子供ながら、意志の強そうな一徹さを秘めたその風貌をよく覚えている、と語っていた。この最後の帰国時に、長沢は甥にあたる赤星鉄馬の東京の屋敷に泊った。それが麻布鳥居坂町三番地の西洋館であったのか、あるいは赤坂台町一番地にある日本式の屋敷であったのか定かではないが、母が遇ったのはこのいずれかの家でのこと。祖母に連れられて行ったという。鳥居坂の洋館跡には、現在国際文化会館が建っている。

## 長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

長沢は一つ違いの弟、すなわち私の曾祖父赤星弥之助とは幼い頃から大変仲が良かった。長沢が幕末の慶応元年（1865）にイギリスへ渡るまで、剣術に勉強に兄弟お互い切磋琢磨して育った。長沢は7人兄弟の四男、弥之助は五男の末子であった。

文久3年（1863）7月、薩英戦争が起った時、父や兄が戦鬪に参加しているのを羨ましく思いながら、長沢と弥之助兄弟は母に伴われ裏山に避難した。気の強い長沢は幼くて戦に加わることができなかったのを、のちのちまで悔やんだという。明治になってから弥之助は五代友厚らと神戸棧橋会社を興し神戸築港に尽力、のち東京で実業家として成功し、茶人・古美術のコレクターとしても知られた。長沢と弥之助は、奇しくもともに実業の世界で身を立てることになったのである。

明治30年（1897）7月、長沢が32年ぶりに初めて帰国した時、横浜に出迎えた弥之助を見て、長沢は嬉しさのあまり薩摩弁で「わや弥之助か」と叫んだという。少年時代の楽しい思い出、見違えるような日本の進歩発展、アメリカでの生活など語り尽くせぬ想いで長沢の胸は一杯になったのであろう。「わや弥之助か」の一言には、32年間にわたる長沢の日本へのすべての想いが込められていたに違いない。その7年後の明治37年、弥之助は病のため死去する。長男の鉄馬は父の熱い想いを汲んで、長沢が帰国するたびに彼を手厚く遇し、長沢のアメリカでの事業を助けるため多額の資金を提供した。

長沢と赤星の絆はいっそう深まった。赤星の一族の中で、長沢はさらに身近な存在となり、親族すべてからアメリカで暮らす「おじ」として親しみを込めて呼ばれ、慕われるようになって行った。

私が大学へ通う年齢になってからも、親戚の間で「長沢のおじ」が時おり話題に上ることがあった。私は不思議な感懐を抱きながら彼らの話を聴いていた。私が長沢鼎を、血族の日常的な存在から解き放ち、歴史的な存在として意識するようになったのはその頃からである。「長沢のおじさま」ではなく、「留学生長沢鼎」の存在理由を強く感じはじめていた。

歴史を血族の日常性の中からとり出すのはきわめて困難である。これまで私が長沢鼎を正面きって論じてこなかった理由でもある。しかし、血族でなければ語るこののできない歴史の叙述方法もあろう。これから

私が語ろうとするのは、いわば血族の視点から見た長沢鼎という、ひとりの人間の生き方の問題である。

## 1 洋学者の家

長沢鼎の本名は磯永彦輔である。長沢鼎はイギリス留学時に藩からもらった変名であった。長沢は以後、一生をこの変名で暮らす。長沢鼎という変名が彼の生き方の原点にあった。

磯永という家系は不思議な魅力を持っている。もともとは磯長という字をあてていた。河内国南河内郡の磯長村を出自にもつ磯永氏は、室町時代に四国を経て大隅国小根占村に居を移したと伝えられる。天文年間の16世紀半ばには根占に来航するポルトガル船との貿易で巨利をなしたという。その磯永和泉守吉長から数えて五代目にあたる孫四郎周英が根占郷の本家から独立し鹿児島城下に移り住み、暦学者として一家をなした<sup>(1)</sup>。それが長沢鼎、すなわち磯永彦輔の高曾父である。

周英は18世紀初め頃の享保年間には、天文暦学を研究する洋学者として、薩摩はもとより江戸、京都、長崎などでも令名が高かった。宝暦6年(1756)11月には京都の陰陽頭土御門家から暦法伝授を許されている。日本の暦学に西洋の暦法を応用した周英の独自の暦学は高い評価を受け、のち「薩摩暦」として頒行された。周英の門下からは、薩摩藩最初の天文台である「明時館」の初代暦正官水間良実らが輩出している<sup>(2)</sup>。

周英の子、孫四郎周経も「天文図略説」や「円球万国地海全図」などを著した洋学者として知られたほか、長沢の父孫四郎周徳は鳥津齊彬の近代化政策「集成館事業」の一端を担った開明派の優れた洋学者であった。

長沢と西洋の結びつきは、彼の生まれた時からその生活に根ざした事実として現存していた。長沢が生まれたのは、嘉永5年(1852)2月1日、アメリカ東インド艦隊司令長官のペリー提督が4隻の黒船を率いて浦賀沖に現れる前年である。長沢が11歳の時、文久3年(1863)7月、イギリス艦隊7隻が薩摩へ来襲、生麦事件の始末をめぐる薩英戦争が勃

---

(1) 「磯永家系譜」7頁-8頁。

(2) 拙著『薩摩藩英国留学生』(中央公論社、1974年)22頁-23頁。

長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

発した。自分が幼くて戦に参加できず切齒扼腕したことは前に述べた。幼時の腕白ぶりについては、自らこう述べている。

僕の幼時は随分腕白でナ……今でも覚えて居るのは10歳位の時、市街を歩いていると12,3歳の町人の児が僕に向って何だか無礼な事をいうので、この下司奴<sup>げすめ</sup>と怒鳴りながら追っかけた。彼は武士の児が権幕<sup>けんまく</sup>をかえて怒鳴ったのに驚いて逃げた。その児はとうとう樺山家に逃げ込んだ。僕も追っかけて同家に入った。この時樺山資紀の父君は僕を誰何<sup>すいか</sup>せられた。僕は「町人の児が無礼な言をいうから打ちます」と答えると、老公は「ウン打ってよらしい」といわれた。この当時町人の児が武士に齒向う場合には打つか斬るかされたもので、それが当然と考えられていたものだ<sup>(3)</sup>。

長沢の剛毅は磯永の家の血脈であり、その旺盛な知識欲とも連動していた。彼は幼少の頃から記憶力がよく、四書五経の文句、唐宋の詩文を見事に暗記し、すらすらと詩文の朗読をなして人を驚かしたという<sup>(4)</sup>。いわゆる薩摩弁で言う覇気のある「てんがらもん」（利口者）であった。

薩英戦争後の近代的藩政改革の一環として、元治元年（1864）6月、藩立の洋学校「開成所」が創設された。島津斉彬の遺志を継いだ小松帯刀や大久保利通が建てたものである。英語やオランダ語の基礎から海陸軍に関する軍事学に至るまで幅広く西洋学を教授する学問所であった。藩校造士館から優秀な人材7、80名を選びすぐり開成所へ入学させた。12歳の長沢も選に入って開成所へ移った。初年生の第三等書生であった。開成所に入ると、英語かオランダ語かは本人の希望で選ぶことができる。長沢は希望者の少ない英語を選んだ。そのことが長沢の運命を決める。

英語を選んだ仲間には、のちに一緒にイギリスへ留学した森有礼や鮫島尚信、それに松村淳蔵らがいた。この開成所からイギリスへの派遣留学生を藩が選抜したのは10月頃である。詳しい経緯については省く。いずれにしても15名の若者がイギリスへ派遣されることになり、12歳8カ

(3) 門田明編『薩摩英学史料 鷲津尺魔「長沢鼎翁伝」』（鹿児島県立短期大学人文学会論集『人文』第14号、1990年）21頁。

(4) 同上、20頁。

月の最年少ながら、その勇気と才能を見込まれて長沢も留学生に選ばれた。この当時の心境を長沢は語る。

その内だんだん成長して12歳の春を数えた時には四書の素読<sup>そどく</sup>くらいはすらすらとできるようになった。あたかもよしその頃世の中はかのペルリの浦賀到来以来、久しい間沈惑<sup>ちんわく</sup>していた頑固な夢から覚醒<sup>かくせい</sup>されて、何だか新しい運命が近い将来に横たわるような気がした<sup>(5)</sup>。

元治元年という歳は、幕府による第一次長州征伐が行われ、英・仏・米・蘭の四ヶ国連合艦隊下関攻撃が実施され、世はまさに維新動乱に突入していた。しかし、長沢はこの時捉えようのない不可思議な「新しい運命」が自分を待ち受けていることを、幼い心に感じていた。

年が明けて元治2年（1865）1月18日の夜、長沢は藩からの渡海辞令を受けとった。書面には甌島、そのほか大島諸所へ守衛のため明後日20日に出向け、とだけ記されてあった。海外渡航の文字はどこにもない。日本人の海外渡航はむろん厳禁である。そのことが幕府に知れてはならない。父親の周徳には知らされていたが、この時点で本人が知っていたかどうかはわからない。「私は小さい時出たのでドンナ工合で出たか、私は外国に行くという有様は知らなんだ。コチラに来てから始めて人を知る位で……私は鹿児島を出たのは串木野の羽島浦でアチラに御用があるからというのでソコを出たようです」<sup>(6)</sup>と鹿児島新聞の記者に語っているところをみると、海外渡航の事実は詳しくは知らされていなかったようである。

藩主島津忠義に拝謁したのは翌19日である。その時の様子を長沢は次のように語る。

どんなお鉢の廻り合せか不肖<sup>ふしょう</sup>もまたその選に入って、これらの連中と一所に渡航することになったので、改めて殿様にお目通<sup>めどおり</sup>を願って不日出発する旨を言上に及んだら、殿様は痛く我々の志のほどを欣賞<sup>きんせき</sup>あり、一夕御殿においてわざわざ首途<sup>かど</sup>の宴を催され、お手づから別れの盃<sup>さかずき</sup>を給った。一同は身に余る光栄を有難く頂戴した。

(5) 『鹿児島新聞』大正5年9月20日号、「葡萄王」(一)。

(6) 同上、明治30年7月6日号「長沢鼎君」

## 長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

そして将来いかなる困難に遭遇するとも、必ずただ今のお言葉の次第を肝に銘じて夢忘却<sup>わすれ つかまつ</sup>は仕らず、一意専心その意を励んできつと他日の成果を期し、殿御恩の万分の一に酬<sup>むく</sup>い奉る決心でござれば、何卒御安心のほどひたすらお願い申し上げますと衷心<sup>ちゅうしん</sup>から御返答を申上げた<sup>(7)</sup>。

藩主主義から各々に変名が与えられたのはこの時であろう。この回想を読むと、長沢の主君に対する絶大なる忠心と奉公の精神がよくわかる。幼いがゆえにその使命感は強烈であった。「将来いかなる困難に遭遇するとも、必ずただ今のお言葉の次第を肝に銘じて夢忘却は仕らず」という使命感が彼の一生を支配することとなる。それは特別に下賜された「長沢鼎」の変名とともに、彼の生涯を確実に規定して行く。磯永彦輔が長沢鼎の変名を一生涯使用し続けた理由はここにあったとみてよいであろう。

長沢たち留学生は、团长格の新納久脩や督学の町田久成らに率いられて1月20日の朝、城下を出立し、翌21日午後には申木野郷羽島浦に到着、ここで約2ヵ月をすごす。羽島は密航には適した港であった。船が来るまでの間、彼らは年長者の者たちに英語を習ったりして時を送った。グラヴァー商会所有の蒸気船オースライエン号が羽島に姿を現したのは3月21日の夕刻、そして留学生一行が日本をあとにしたのは翌3月22日の早朝であった。

## 2 北の果て

薩摩藩は留学生派遣にあたって、長崎在住のイギリス商人トーマス・ブレイク・グラヴァーの全面的な援助を受けている。グラヴァー商会は香港に本店を持つ有力商社ジャーディン・マセソン商会の長崎代理店の資格でアジア貿易の業務に従事していた。代表者のグラヴァーはスコットランド出身で義侠心に富み、薩摩や長州の藩士たちに知己が多かった。

薩摩の五代友厚と親しかったところから、彼の求めに応じて留学生援助を引き受けた。留学生のためジャーディン・マセソン商会と交渉し、

(7) 『鹿児島新聞』大正5年9月20日号、「葡萄王」(一)。

信用状の発行や薩摩藩の振り出す手形の買い取りなどで便宜を図った。留学生たちの乗り継ぐ船の手配をしたほか、一行の世話役として社員のライル・ホームを同行させた。

このグラヴァーの存在が長沢の生き方に大きな影響を与える。留学生に年少の者を加えることはグラヴァー自身の希望でもあった。その少年を自らの故郷であるスコットランドのアバディーンへ送り教育を受けさせたいと思っていた。それが留学生援助の条件の一つでもあった。ロンドン到着後の7月27日、新納と町田が連名で藩庁へ送った手紙にこうある。

長沢鼎事は、長崎<sup>(グラヴァー)</sup>コロウルの弟、拾三才の者まかり居り、これと一緒に入学いたさせたきの事、分けて承<sup>うけたまわ</sup>り候に付、その意に応じ差し遣わせ候。もっとも長崎にて初め遠航<sup>ひきあい</sup>の事を引合候時分より、少年の者を分けて相望<sup>あい</sup>み候に付、ほどよく相対置<sup>あい</sup>候ところ、その儀今に連続、右様の次第に相成<sup>あいな</sup>り候故、今更<sup>い</sup>に断りも申し入れ難き次第にて遣わし候。しかしながらコロウルの両親相応の老年にて、ことの外<sup>ていねい</sup>に<sup>じきし</sup>、実に直子如き取り扱<sup>あつかい</sup>に相見<sup>あい</sup>得候<sup>え</sup>(<sup>8</sup>)。

留学生一行19名は5月28日（新暦6月21日）未明にイギリスのサザンプトン港に着き、同日夜には汽車でロンドン入りした。停車場で彼らを出迎えたのは、トーマス・グラヴァーの兄ジェイムズであった。このジェイムズやライル・ホームたちの世話で、留学生たちはロンドン大学の新学期が始まるまでの約3ヵ月を、家庭教師に就いて英語を勉強しながら共同生活を送ることになる。

長沢が皆と別れて、ひとりスコットランドのアバディーンへと旅立ったのは、それから2カ月後の6月28日（新暦8月19日）のことであった。ジェイムズとともにアバディーンへ向かった長沢は、同地にある中学校ギムナジウムに入学する予定になっていた。そこは、グラヴァーの母校でもあり、グラヴァーの末弟アルフレッドが通っている学校でもあった。アルフレッドは1850年生まれの15歳で、長沢とは2つ違いであった。

手紙の前半部分はこのことを指している。グラヴァーがアルフレッド

(8) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 玉里島津家史料』第4巻（鹿児島県、1995年）309頁。

## 長沢鼎かなえという生き方

と一緒に自分の母校に長沢を入学させたいと言っているのに、彼の望みむげを無碍にもできず、長沢をアバティーンへ遣ることにしたというのである。新納も町田も、年少の長沢をひとりスコットランドの北の果てに送り出すことに多少の不安を感じていた。しかし彼らの不安は杞憂に終わる。長沢は孤独という苦難を見事に乗り越え、それを自己変革の契機と捉え、さらに逞しい青年へと育てて行く。

長沢より5つ年上の森有礼は、国元の兄へあてた手紙で次のように言う。

一人長沢氏はスコットランドの方へ行き、(グラヴァー)ガラバの小弟と同く学問のつもりにて、すでに先達せんだつて出越し相成りあいな申し候。未だ小児の事、ようやく私共も相別れ申し、誠にこの児は剛気の人にてすえ頼母敷たのもしき人に御座候<sup>(9)</sup>。

森と長沢はこのあと将来にわたり無二の親友となる。森は長沢にとって生涯心を許し合える最愛の友であった。「剛気の人」, 「すえ頼母敷人」という森の言葉には、長沢に対する森の信頼感がよく表れている。

新暦の8月末アバティーンに着いた長沢は、グラヴァーの両親が住む家に荷を解く。場所は市の近郊、ドン河をはさんで北側のブリッジ・オブ・ドン地区にあった。父親のトーマス・ベリー・グラヴァーはスコットランドの沿岸警備隊の一等航海士(中尉)を勤めていたが、一年前に退職し60歳で健在であった。母親のメアリーも58歳で元気に暮らしていた。家には、ほかに妹のマーサ(23歳)と弟のアルフレッド(15歳)がいた。

グラヴァーの老夫婦は長沢を実の子のようによく面倒をみて、可愛がった。先の新納と町田の手紙に、「実に直子じきしの如き取り扱あつかい」とはこのことを指す。

長沢の言葉を聴いてみよう。

それから私は(グラヴァー)グラマという所で始めは2カ月ばかり人を雇うて毎日勉強して居ったが、その時には全く言葉も分らず屢々しばしば泣いたことがある——タッター人であったから困ったが、だんだん言葉も分るようになって来た。そうして私はスコットランドの小児なんかと一緒に

(9) 上沼八郎・犬塚孝明編『新修森有礼全集』第3巻(文泉堂書店, 1998年)45頁。



に同じようなものを稽古して居った<sup>(10)</sup>。

長沢が2ヵ月間の基礎学習を終えて、秋の新学期開始とともに入学したのは、同市シャノンリーにあるギムナジウムと呼ばれる私立中学校であった。同校は1848年に開校されたばかりの学校であったが、教育水準は高く語学や人文科学などの伝統的な古典科目を中心に授業を行っていた。いわば実務よりも教養重視の学校であった<sup>(11)</sup>。トーマス・ブレイク・グラヴァーの母校であったことは前にも述べた。長沢はアルフレッドと一緒にグラヴァーの家から毎日この学校に通った。

アバディーンでの生活にも慣れ、英語も流暢に話せるようになった長沢は、しだいに本来の「剛毅」な性格をとり戻して行く。学校の往復で、仲間の少年と喧嘩になると、必ずポケットから懐中時計を取り出し、それを振り回して相手を打ちすえたという。長沢いわく。

私の持っていた時計は銀時計の厚いものでありました。クサリは金で太い丈夫なものであった。喧嘩になるとその時計をポケットから抜きとり、クサリをつかんで敵を打ってやりました。時計は時を見るために用事がない。全く喧嘩の時の武器であった<sup>(12)</sup>。

長沢は喧嘩に強いばかりでなく、義侠心に富み情に厚く、勉強のよくできる俊才であった。一年後に発表された成績優秀者のリストに、長沢はラテン語、英語読解、聖書演習、歴史、地理、書道の六科目において優秀者としてその名があがっている<sup>(13)</sup>。

アバディーンでの最初の一年が終わろうとしていた1866年3月31日、日本から3人の留学生がやってきた。佐賀藩の石丸安世と馬渡俊邁、それに広島藩の野村文夫である。彼らはやはりグラヴァーの世話で長崎からイギリスへ密航した。その年はじめに長州から竹田庸次郎がアバディーンへ到着していたので、ここで一気に日本人留学生は5人に増えた。

野村は長沢の才能に感歎する。

---

<sup>(10)</sup> 『鹿兒島新聞』明治30年7月7日号、「長沢鼎君」(二)

<sup>(11)</sup> 杉山伸也『明治維新とイギリス商人——トマス・グラバーの生涯——』(岩波書店、1993年)43頁-44頁

<sup>(12)</sup> 前掲『薩摩英学史料 鷲津尺魔「長沢鼎翁伝」』20頁。

<sup>(13)</sup> 杉山前掲書、174頁。

午後長沢日折訪ね来る。薩摩にして今年十三歳、この土に留ること  
わずかに四ヶ月なりしが、英語を以て談ずる流るが如し。一座大に  
驚く。その英敏恐るべし。英人もまた大にこれを称す<sup>(14)</sup>。

長沢の孤独も解消された。グラヴァーの実家を中心にしてアバディーンに日本人の留学生サークルが出来上がったのである<sup>(15)</sup>。

夏の休暇に入った8月初め、長沢の留学仲間であった鮫島尚信と吉田清成がロンドンからアバディーンへ遊びに来た。8月10日には日本人7人そろって、ヴィクトリア女王の夏の避暑地として有名なバルモラル城へ見学に行き、13日午後には鮫島、吉田、長沢の3人で、当時イギリスの下院議員であったローレンス・オリファントの待つスターリングへと向かう<sup>(16)</sup>。鮫島たちにスコットランド行きを勧めたのはオリファントであった。オリファントは外交官として来日経験もあり、親日家として評判の高かった人物である。イギリス社交界では名の知られた小説家、紀行家であり、そのすぐれた政治的才覚によって、自由党の若手議員として将来を嘱望されていた。彼は、現今のヨーロッパ文明社会の腐敗と墮落、列強諸国による貪欲な搾取と篡奪の歴史を、日本人留学生たちにくり返し語って聞かせた。

スターリングでオリファントは鮫島と吉田に、これから一緒にアメリカへ渡るよう勧めた。理由はオリファントの信奉する宗教家トーマス・レイク・ハリスに彼らを引き合わせるためである。ホテルで2時間かけて議論をしたすえに、2人はアメリカ行きを決意した。

8月18日にイギリスを発った彼らは、ニューヨーク州アメニアにあるハリスの宗教的コロニイを訪れ、そこで触れ得た愛の「気」と自己を否定した激しい労働の生活に感動するとともに、ハリスの説く文明批判に深い感銘を受けた<sup>(17)</sup>。ここに薩摩藩の留学生たちとハリスとの間に深い絆が作られる。

<sup>(14)</sup> 「乗槎日録」慶応2年4月1日の条（『野村文夫関係史料』、本邦書籍、1982年）

<sup>(15)</sup> 拙著『密航留学生たちの明治維新——井上馨と幕末藩士——』（日本放送出版協会、2001年）136頁-137頁

<sup>(16)</sup> 拙稿「黎明期日本外交と鮫島尚信」（鮫島文書研究会編『鮫島尚信在欧外交書簡録』、思文閣出版、2002年）555頁-556頁。

<sup>(17)</sup> 同上、556頁-557頁。

ところで、長沢の通ったギムナジウム中学は、もともと聖職希望者を大学へ進学させる目的で作られた予備校のようなものであったから、必然的に宗教色が濃かった。校長も聖職者であった。ここで多感な時期を過ごした長沢は、恐らく信仰の問題に悩んだに違いない。聖書演習の成績は2年連続で2位である。留学生の中でも宗教家ハリスとの接点は最も近い位置にある。

ローレンス・オリファントの紹介で留学生たちがロンドンでハリスに遇ったのは、1867年初春の頃と思われる。スウェーデンボルグ派のスピリチュアリストでラディカルな社会改良主義者でもあったハリスは、アメニアに「新生社」(the Brotherhood of the New Life)と称する特殊なコロニーを開設し、「真のキリスト教回復」と新しい文明世界の創造と再生とをめざす「神の事業」にとり組んでいた。当時43歳の働き盛りであった。ハリスの教義の内容を深く理解せずに、「祖国再建」のチャンスと捉えた留学生たちは、維新の動乱で国元からの学費送金がとどこおっていたこともあって、オリファントやハリスに誘われるままにアメリカへ渡る決心をする。長沢、鮫島、森、吉田、松村、それに畠山義成の6人であった。

1867年の夏の休暇が始まって間もなく、15歳の長沢はアバディーンを発ち、ようやく皆の待つロンドンに戻ることができた。港には森が出迎えに来てくれたという。長沢は渡米事情を回想して言う。

すると米国のハリスというお方が何か所用にてロンドンにお出でになって居たが、外国から来て金がなくなって居るなら雇やといに出たらドウだ。もしその気なら米国に來い。そうすれば半日仕事をして半日修行させる。私の方から申入れるがドウだろうという御相談があったので、ついに英国を去って今の米国にやって來たのである<sup>(18)</sup>。

他の5人と異なり、長沢の場合は「祖国再建」への意識は希薄であった。年齢もあるが、2年間のアバディーンでの生活で、信仰心と言えないまでも、強い宗教的な精神を植え付けられた。それは当時の日本人にはほとんど見られない普遍的な人間性への理解を可能とした。いわゆるコスモポリタンのな生き方に違和感を持たないようにしていた。その

<sup>(18)</sup> 『鹿児島新聞』明治30年7月7日号、「長沢鼎君」(二)

ことが国事に従事していることをはっきりと自覚していた他の5人と、長沢とを区別できる大きな要因であろう。後年彼が帰国せずに、ハリスのもとで「神の事業」に従事しアメリカにとどまる決意をしたのも、こうした理由に基づくところが大きいように思うのである。だが、長沢の名前を捨てなかった事実が示しているように、彼の薩摩に対する帰属意識だけは生涯消えなかった。それが長沢にもっとも日本人らしい側面を持たせる結果となったのである。

### 3 新天地を求めて

1867年8月13日、長沢は5人の仲間とアメリカへ渡り、ハリスの営むコロニイのあるニューヨーク州アメニアに向かった。このThe Useとも呼ばれるコロニイの生活は、農耕と葡萄栽培による激しい肉体労働を中心に営まれていたが、私有財産を認めないところから、ここではハリスが「父長」として全財産を掌握管理していた。

長沢の言葉から。

そうして私などは森サンなども一処にニューヨークに住んで居て其<sup>そこ</sup>処<sup>マイル</sup>から四哩ばかりもあるワッセーという所、其<sup>そこ</sup>処<sup>そこ</sup>から毎朝運動をしてアメニヤという所に来て仕事をして居<sup>おっ</sup>た。其<sup>そこ</sup>処<sup>そこ</sup>は葡萄の苗を植える所で半日は学校に<sup>はい</sup>這入って――

葡萄の苗をば鉢<sup>お</sup>に植へたり又は外に出したりする位ので、其<sup>そこ</sup>処<sup>そこ</sup>に大概三日か四日居<sup>お</sup>ったが、それからミストルハリスの友達がニューヨークのブロクトンという所によい地面があるという話があったので、ハリスは大きな地面を買<sup>お</sup>うて其<sup>そこ</sup>処<sup>そこ</sup>に行ったから、私共の連中も一緒に伴<sup>は</sup>れた<sup>(19)</sup>。

新しいブロクトンのコロニイは、アメニアから西へ約500キロ、ニューヨーク州北部のエリー湖畔にあった。メンバーはここを「エリーのサレム」(Salem on the Erie)と呼んだ。コロニイは長さ4キロ、幅2キロにおよぶ広大な土地(約250万坪)で、購入資金のほとんどをオリファントの母親で信者のマリアが出資、葡萄栽培を主な収入源として生活が成り立っていた。ちなみに葡萄の栽培面積は15エーカー(約18000坪)

<sup>(19)</sup> 同注(18)

であった。

ハリスが夫人と鮫島、吉田を連れてプロクトンへ移ったのが10月末、長沢が他の仲間と移ったのが12月29日である。この時点で新着の薩摩からの留学生も加えて、全部で11人の日本人留学生たちがプロクトンのコロニーに集った。

ここで彼らは、毎朝4時半から5時には起床し、牛の水汲み、木材の伐採、ほし草の梱包など屋外労働から、洗濯、皿洗い、靴磨きなど家内雑用に至るまで数多くの激しい労働に従事した。それはハリスから与えられた神聖な任務であり、この労働を通じて彼らは神を知り、自己再生をとげ、真の文明人へと脱皮するはずであった。

再び長沢の言葉を聴こう。

プロクトンに着いてからはチョット言へば大きな杉の木を見た様な木を鋸をもって挽いたり、または杭を造ったりして、其処に年内に葡萄を作るつもりでありました。やはり前のように半日学問をしながら——スルト其処に久松、島田、工藤、村上、野村などいう人々が、ミストルハリスの教えを受けるためにやって来た<sup>(20)</sup>。

文中に言う久松（本名江夏蘇助）、島田（仁礼景範）、工藤（湯地定基）、村上（谷元道之）、野村（野村高文）は、いずれも薩摩藩からの第2次アメリカ留学生の面々である。プロクトンのコロニーに11人の日本人留学生が集ったことで、ハリスは彼らのために「日本人学校」を開設しようと考えていた。しかし、この計画は、留学生たちの多くがコロニーから間もなく去ったことで挫折せざるを得なかった。

武士的な階級意識を捨てて、彼らが下賤な肉体労働に従ったのも、ハリスの教えを純粹に信じて祖国を救いたいとの一念からであった。しかし、その教えが彼らの考えと矛盾するとわかった時、すなわち「祖国の危急を救う」というその志士的国家意識が、ハリスに理解されないとわかった時、彼らのハリスに対する服従心は失われる。1868年5月に長沢、森、鮫島、野村を除いた7人の留学生がハリスのコロニーを去り、それぞれの志望に合わせて各地の大学へ入り直す。森と鮫島はハリスの命令で6月には日本へ帰った。野村も明治4年（1871）には帰国した。

<sup>(20)</sup> 『鹿児島新聞』明治30年7月8日号、「長沢鼎君」（三）

長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

明治維新を達成した日本には新政権が誕生し、祖国は大きく変わった。アメリカから帰国した留学生たちの働きかけで、新政府は残留した者たちを政府の正式な給費留学生として認めた。1869年6月29日（明治2年5月20日）付で、長沢も他の者たちとともに月600ドルの学費支給の達を受け、政府留学生となった。この太政官達が彼らのもとに届いたのは、恐らく7月下旬頃であつたろう。そこには「別して学業勉励、皇国の御為筋相心得、謹慎修業致すべく候」<sup>(21)</sup>と記されてあつた。しかも長沢には特に「医学」を学ぶよう指令が出ていた。

命令を受けとつた長沢は大学入学の準備を始めた。彼がコーネル大学に正式に入学したのは翌1870年10月であつた。学寮カスカディッラ・ブレイス40号に入居し、医学ではなく好きな博物学を学ぶことにした。長沢は日本人として初のコーネル大学留学生の榮譽を手にしたのである。

しかし、彼は国家のために勉学を続けるべきか、ハリスのもとで自己再生をはたし、コスモポリタンとしての道を歩むべきか悩んでいた。1871年1月から4月にかけての4ヵ月間にわたる長沢の英文日記が残っている。その1月1日の記述にこうある。

僕はかつてこれほど悲しく不幸な正月をすごしたことはない。自分の胸中を深く省察するに、これまでの行動、考え、目的のすべてが利己的なものであることがわかった。だが、僕の熱望は新年の始りとともに神へのより高尚で深遠な献身をもって報われるに違いない<sup>(22)</sup>。

結局、長沢は大学を退学する決意をする。1月3日であつた。コロニイの幹部たちの意見が大きく影響していた。その後の記述にも、「1日中ずっと泣いていた」とか、「現在の苦闘」、「みじめな思い」といった記述が目につく。1月20日、コーネル大学から送り返された荷物が届いた時も、長沢は「今日は暗くわびしい」と書いている。

また、「自分が何か特殊な科学分野を身につけたり、書物による学習をしたりすることに没頭しないのを見て、怠惰であると日本政府は不満に思うに違いない」と記し、このことを思うと胸が痛むという。だが、

<sup>(21)</sup> 前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第6巻（鹿児島県、1979年）257頁。

<sup>(22)</sup> “Diaries of Kanaye Nagasawa” P.1

祖国のために政府の命令通りに働く人は多いが、人々にとって最も必要なのは、「人間社会の基礎になっている、より深い知識」なのではないかとも言う<sup>(23)</sup>。これこそ、長沢がコスモポリタンのな生き方を選んだ最も大きな理由であろう。

こうした長沢の苦悩を癒すためでもあったのか、ハリスは長沢を連れてヨーロッパを旅する。実際はハリス自身が普仏戦争の状況を視察するためであった。長沢いわく。

初め私は大学に入りて理学の学問をするつもりであったが、病気のために半途にしてミストルハリスの家へ再び帰って、次の歳、普仏戦争後の景況を看がためにヨーロッパに出かけた——

そうしてハリスさんに伴はれて英吉利に涉って行って、アチラに長く居るつもりであったが、殆んど二、三月たつてその秋に帰って来た。英吉利に行った時には前に一緒に居って艱難辛苦を共にした鮫島サンが公使で仏蘭西の公使もして居たッけ。その公使館に行って久しぶりで遇ったが、何でも鮫島サンが一番始めの公使の様でした<sup>(24)</sup>。

鮫島尚信が外務省初の少弁務使に任じられてパリに公使館を開いたのが、1871年6月、パリ・コミューンの乱が終わった直後であった。したがって、長沢がパリのラ・レーヌ・オルタンス通り26番地にあった日本最初の公使館に鮫島を訪ねたのは、恐らく1871年の夏から秋にかけての頃であったろう。

長沢はパリ・コミューン後のパリ市内の様子を次のように話す。

戦があつてすぐでした。その時パリスでは大きなホテルなどを人民が焼いて居たのも見ました。

訳は分らぬけれども余程人民が金持を嫌ったものと見え、殊に負け戦さをしたのでアスコに残つて居たる政府の建物を崩し、道路などには台場のようなものを拵らへて道を止めたり種々雑多なことをして居たから、市中でさへ通ることが出来ないのみならず、其処此

(23) 門田明・テリー・ジョーンズ著『カリフォルニアの土魂——薩摩留学生長沢鼎小伝——』（本邦書籍、1983年）99頁。

(24) 『鹿児島新聞』明治30年7月8日号、「長沢鼎君」（三）

長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

廻<sup>こ</sup>には血痕も大分見えて居ったが、或は戦争よりは今の人民が起って政府の建物を崩したり、貴顕紳士の家などを焼いたりした方の害が多いかも知れない<sup>(25)</sup>。

20歳の春を迎えた長沢は、ヨーロッパ見聞を通して、より広い視野を持った青年へと成長していた。長沢がやはり日本初のアメリカ駐在少弁務使であった森有礼をワシントンに訪ねたのは、1872年春、ヨーロッパから帰国直後のことではなかったか。自身が迷っていた日本へ帰るかどうかを相談するためであった。長沢は次のように語る。

ン、そうサ、その時私は日本に帰ろうかと思ってワシントンの日本公使館に行きアスコでも一ト月、二タ月勉強して居ったが、私は森サンに日本に帰りたいたいという話を仕掛<sup>しか</sup>けた所が、森サンの仰しやるには来年は私も帰るから一緒に行こうというお話でありました。デ私の見込が少し違<sup>ちが</sup>ったから、我考へ通りにすることが出来ないのならば帰らぬという決心<sup>きん</sup>を極め、其廻<sup>こ</sup>から元のハリスさんの所へ帰って来た。ミストルハリスは私をば自分の児のように可愛がられた。今でもそうです<sup>(26)</sup>。

ワシントンに赴任する前、森はわざわざプロクトンを訪ね、ハリスと長沢に会い一週間をすごしている。1871年3月であった。この時も長沢は長い時間をかけて森に自分の悩みを打ち明けたようである。

森との会話を通じて、長沢は自分がコスモポリタンとして生きていく決心をした。恐らく彼の考える普遍的な人間性に基づく社会が、祖国日本では築くことができない、と感じたからに違いない。長沢は1871年1月23日、ハリスから直接オリバー・クロムウェル・ハリス (Oliver Cromwell Harris) という名を与えられていた。そのことも長沢がアメリカにとどまる決意を固めた理由の一つであろう。ハリスは長沢を、自分の事業を継承するにふさわしい勇敢で有能な協力者と見なすようになっていたのである。長沢もその恩に報いたいと思うようになっていた。

<sup>(25)</sup> 『鹿児島新聞』明治30年7月8日号、「長沢鼎君」(三)

<sup>(26)</sup> 同上、明治30年7月9日号、「長沢鼎君」(四)



#### 4 葡萄王

プロクトンの冬は寒く、葡萄栽培にとって最適とは言えなかった。年を重ねるにしたがい、ハリスもその厳しい自然に耐え切れなくなっていた。メンバーの多くが葡萄栽培に適した温暖な地に移ることを考え始めた。プロクトンの有力な資金源であったローレンス・オリファントとハリスの不和もそれに拍車をかけた。ハリスがアメリカの西部カリフォルニアへの移住を決意したのは、1875年の初めであった。6年前に大陸横断鉄道が完成し、西部への移動はきわめて容易になっていた。

すでに23歳の若者に成長していた長沢は、新天地で新種の葡萄が栽培できる喜びを感じていた。これまでの知識と経験を存分に発揮できるまたとないチャンスであった。当時サンフランシスコの総領事であった高木三郎にも協力を依頼した。高木はかつて森有礼の部下で長沢とも親しかった。

1875年2月半ば、ハリスはミセス・リーカとその息子、それに長沢と新井常之進を伴ってプロクトンを発った。新井は、森が少弁務使としてワシントン赴任の際、コロニーに連れてきたもと仙台藩の藩士であった。キリスト教に深く傾倒し、ハリスの教団に加わることを強く望んでいた。帰国後、新井は奥蘆<sup>おうすい</sup>と名のり牧師となった。

カリフォルニアに着いたハリス一行は、サンフランシスコの北90キロのところにあるサンタローザに理想的な土地を見つけた。こもり茂った木立の中、所々に泉が湧き、なだらかな起伏に富んだ美しい丘陵地帯であった。山裾のヒールズバーグ街道を旅する者で、谷の東側山麓一帯に広がるこの丘陵地が織りなす緑と青の自然のすばらしさに、目を見はらない者はなかったという。ここにハリスは400エーカー（約50万坪）の土地を購入、自らファウンテングローブ農場（Fountain Grove Ranch）と名づけて、7月から住居や諸施設の建築を始めた。その名のとおりに、「泉湧く木立」に囲まれた理想郷となるはずであった。

11月に完成した母屋は英国風の建物で、100人の客をもてなすことのできる食堂が備えられ、内部は世界中から集められた絵画、美術品で飾られていたという<sup>(27)</sup>。家具調度類も贅<sup>ぜい</sup>を尽くし、書齋は美術的、文学

<sup>(27)</sup> 門田・テリー・ジョンズ前掲書、110頁-112頁。

## 長沢<sup>かなえ</sup>鼎という生き方

的な雰囲気にあふれていた。地上の楽園をめざしたハリスは、植物栽培のための広大な温室を設け、周囲には多くの花を植えた。2年後、ファウンテングローブの丘の斜面は色彩りどりの花々でおおわれ、訪れる人たちの目を奪うほどの美しさであったという。その後の農地の買い増しで、10年後のファウンテングローブは1850エーカー（約226万坪）の大農場へと発展した。

長沢はその時の様子を次のように回想している。

始め行った時にはマルで<sup>かし</sup>榎の木などがあるだけの山の中で、一軒の家もなかったのだが、それからだんだん木を伐り草を刈り家を建てて土地の開拓に取りかかった。もちろん麓の方には少し樹のない所もあったが、山一面はズーツと林だから、それを根から掘って<sup>た</sup>焚き物をこしらえ、そうして色々の植物を植付けた。木やら果物やら葡萄やらドンドン植付けた<sup>(28)</sup>。

長沢が本格的に葡萄の植付けとワイン醸造所の建築にとりかかったのは、1879年のことである。サンタローザに移って4年目であった。長沢は葡萄栽培に関する様々な記録や研究書を読み、確信を得て納得するまで研究を重ね、実行に移した。アメリカ国内やヨーロッパから多数の苗木を取り寄せ、中国人、イタリア人労働者を雇い、400エーカー（約50万坪）にわたって栽培を始めた。1882年、長沢30歳の時、60万ガロン（約227万リットル）の貯蔵能力のあるワイン醸造所が完成した。

長沢の生涯かけたワイン造りが始まる。彼は労働者と一緒に、汗水たらして働いた。醸造所から最初のワインが出荷された時、長沢の顔は喜びで輝いていた。彼はそれを「ファウンテングローブ・ワイン」と名付けた。以後、長沢は醸造技術の研究や品種改良の実験をくり返しつつ、農園の規模を拡大、1889年には成木の葡萄園の広さでは、カリフォルニアで十指に入るまでに発展した。93年当時、収穫高は1500トンに達し、21万ガロン（約77万リットル）のワインを醸造、ヨーロッパや日本にも輸出され、フランス産ワインと充分に太刀打ちできるまでになった。今日のようにカリフォルニア産のワインが、味、質ともにヨーロッパ産ワインに匹敵するに至った功績の一端は、この時の長沢の努力に帰せられ

<sup>(28)</sup> 『鹿児島新聞』明治30年7月9日号、「長沢鼎君」（四）

るといっても過言ではない。

1906年3月、ハリスの死によりその全遺産を継承した長沢は、さらに広大な葡萄園を開拓することに成功、その周囲20キロ、使用人300人、資産およそ2000万ドルと推定され、名実ともに「葡萄王」となった。彼はソノマ地方開拓の先駆者、ワイン産業界最高の指導者として、在留邦人ばかりでなく多くのアメリカ人たちからも、「バロン」「プリンス」と呼ばれて畏怖と尊敬の念を抱かれるようになった。当時サンタローザを訪れた農学者佐々木喬の回想が残っている。

翁が若かりしとき、とある米人から譲り受けられた広大なる地所は、今や美しい葡萄の畑の連接であり、蜿蜒<sup>えんえん</sup>、山から丘に葡萄の株が際涯<sup>さいはて</sup>もなく連列する光景を眺めては、誰か葡萄王なる尊称の存在に異議を唱えるものがあるだろうか。住居の近くにはドッシリした古風な醸造庫が年代的威容を示している。……翁の住居は重厚に出来ていて決して華麗な要素はなく、むしろ質実剛健な造りというべきであろう。何日迄も燃え続くかと思われる葡萄の大株のゆらゆらと焰を立てている古風な暖炉に、翁自らナイフを採って分たる七面鳥の御馳走に、古式な重々しい寝台に、奥床しい荘重な気分が充満している<sup>(29)</sup>。

また、外交官の夫とともに何回かサンタローザを訪ねたことのある筆者の伯母山路澄子も、かつて雑誌の記者のインタビューにこう答えている。

まったくのイギリス式の生活をしていました。農園は馬車で一日かけても回りきれないほど広く、庭には七面鳥が何十羽といました。夫の赴任地のワシントンにいる時には、食べきれないほどのオレンジ、ブドウ、それに自分のところで作った大きな大きなハムやベーコンやら送ってくれました<sup>(30)</sup>。

筆者が伯母から直接聴いた話では、大きく立派な書齋でくつろいでいる時には、いつでも分厚い本を読みながら、悠然と葉巻をくゆらしている

(29) 佐々木喬「サンタローザの両翁」（『写真農業地理』その11）。

(30) 「レーガン大統領がベタほめの日系ブドウ王はサムライ留学生だった」（『サンデー毎日』昭和58年12月4日号）170頁。

長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

たという。彼は精悍、敏捷で、品格にすぐれた男であった。生涯を独身で通し、英国風の宏壮な邸宅に住み、最高の絵画、書物の数々に囲まれて、文字通り晴耕雨読の閑雅な生活を送った。長沢がいかにかコスモポリタンとして生きていたかを知るエピソードがある。

先の佐々木博士が、長沢とサンタローザのレストランで昼食をともにした折の話である。

新しく開いたばかりの店に長沢が入って行くと、アメリカ人の主婦が急ぎ足で出迎える。やがて長沢がおもむろに開店祝いの言葉を述べて、その主婦がお礼の挨拶をする。その間に決して長沢なる日本人も、また主婦なるアメリカ人もなかったと佐々木は言う。いわく。

この二人の談話の間に人種的隔壁は微塵もこれを見出し得なかった。土地の名家の主人公に対する敬意が自然的に表現していた。筆者外遊三年間にこの一瞬は真に云い知れない嬉しさを感じた一の場合であった。長沢翁は真にサンタローザの親しき名豪であったのである<sup>(31)</sup>。

生涯を独身で通したのも、神の事業を継ぐ者として、自分に厳しい戒律を課していたのかも知れない。それは長沢のみが知ることである。だが、彼の胸中に、つねに祖国日本があったことは確かである。発明王エジソン、詩人マーカム、農学者バーバンクをはじめ、多くのアメリカ文化人たちと知的交流を深める一方、周到な移民計画を練って多数の日系移民を援助、日本の近代化と日米文化交流に尽力した。

長沢は生涯に4回しか日本に帰らなかったが、自分が紛れもない日本人であり薩摩人であることは片時も忘れなかった。彼は日本国籍のまま、藩主から賜った「長沢鼎」の名を一生用い、日本の「ナガサワ」として、日米両国の架け橋たらんとした。その意味で長沢は、日本人としての矜持を捨てることなく、カリフォルニアで生き続けた稀有のコスモポリタンではなかったかと思うのである。

---

<sup>(31)</sup> 佐々木前掲論文

## おわりに

長沢鼎がファウンテン・グローブの自邸で静かに息を引きとったのは、昭和9年（1934）3月1日であった。82年の長い生涯であった。前日、長沢は家事を手伝っていたすべての人々をベッドの傍らに呼び、小さいがはっきりした声で「もうお別れの時が近くなったようだ。……死を美しく迎えたい……」と語ったという<sup>(32)</sup>。長沢はもっとも日本人らしい、そして武士らしい死を望んでいたのであろう。コスモポリタンとして生きる決心をした長沢の心から、最期まで祖国日本が消えることはなかったに違いない。

長沢の死から約半世紀が経った昭和58年（1983）11月11日、時のアメリカ合衆国大統領ロナルド・レーガンが来日、国会で次のような演説を行なった。

1865年、長沢鼎というひとりの若いサムライ留学生が、何が西洋を経済的に強くし、技術的に進歩させたのかを学ぶため、日本を旅立った。やがて彼は「カリフォルニアの葡萄王」として知れわたるようになった。長沢は、学ぶためにカリフォルニアを訪れ、そこに住みつき、われわれの生活を豊かにしてくれたのである<sup>(33)</sup>。

カリフォルニアに育ったレーガンは、留学生たちを西洋に惹きつけたものが何であったのかを、日本人以上に理解していた。これからあるべき国の「すがた」「かたち」を問うために、彼らは国禁を犯して日本を発った。しかも、その決意は日本のすがたを変えるにとどまらなかった。カリフォルニアの「すがた」をも変えるほど豊かな実りをもたらしたのである。コスモポリタンとして生きた長沢鼎の志は、半世紀を経てアメリカ大統領の言葉によって見事に蘇った。

そして20年以上の時が流れ、平成19年（2007）7月28日、長沢の功績を讃える「ナガサワ・コミュニティー・パーク」がサンタローザのワイン醸造所跡地に開園し、現地でそのセレモニーが行なわれた。日系人ははじめ地元の人など約200人が祝ったという。長沢鼎の大きな志を、カリフォルニアの人々のみならず日本の人々が、いやわれわれ血を引く者

<sup>(32)</sup> 門田・テリー・ジョンズ前掲書、185頁。

<sup>(33)</sup> “Address by President Regan at National Diet, November 11, 1983”

長沢鼎<sup>かなえ</sup>という生き方

たちがもっとよく理解し、次代へと引き継いで行く必要があるのではな  
かろうか。

(付記) 昨年9月1日、長沢鼎研究の先駆者として多大な業績を遺され  
た鹿児島県立短期大学名誉教授門田明氏が逝かれた。生前の学恩に感謝  
し、門田明先生に本稿を捧げる。

(鹿児島純心女子大学教授)